高野岩三郎とD.リャザーノフとの往復書簡（1928年～1930年）

大村　　泉

はじめに
1　ロシア国立社会＝政治史アルヒーフ所蔵大原社研関連文書概観
2　リャザーノフ，高野岩三郎往復書簡が提起する諸問題
(1)　内藤赳夫『日本マルクス主義文献』
(2)　聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』の企画
(3)　マルクス/エンゲルスの紛失文書調査
補説：東北大学附属図書館所蔵『哲学の貧困』マルクス手沢本の第一同定者について
(4)　福井孝治，石浜知行旧蔵マルクス/エンゲルス書簡の公表

はじめに

筆者は，1999年秋に，MEGA編集に関する所用で社会＝民族問題ロシア独立研究所（モスクワ）(1991～)を訪問した。この研究所の前身はマルクス＝レーニン主義研究所（モスクワ）(1956-1991)であり，研究所の建物はかつてのマルクス＝レーニン主義研究所の本部棟を使用している。MEGAに関する協議を終えた筆者は独立研のエレーナ・アルジャーノヴァ女史に伴われて地下倉庫を見学した。倉庫の一室はロシア語版マルクス/エンゲルス著作集や新旧両MEGAの編集のためのArbeitsmaterialien（作業文書）の保管庫として利用されていた。同女史に保管庫を案内されたとき，久保誠二郎が本誌収載の論考[1]で詳論した『日本マルクス主義文献』――原題：“DIE JAPANISCHE LITERATUR UEBER MARX, ENGELS UND MARXISMUS VON 1919 BIS ENDE 1927 ”(1919年から1927年末までのマルクス/エンゲルス，マルクス主義に関する日本語文献)――を紹介され，コピーの作成を許された。この文献目録はリャザーノフの依頼を受けた高野岩三郎（大原社会問題研究所初代所長，1871-1949）が所員の内藤赳夫に命じて作成させたものである。

筆者は，2001年初夏，同じくMEGAに関する所用でロシア国立社会＝政治史アルヒーフ（モスク

(1)　久保誠二郎「大原社会問題研究所『日本マルクス主義文献』（未刊行）の意義――戦前期大原社研の国際交流と内藤赳夫の文献目録への取り組み――」，本誌本号，1-15頁，参照。

ワ）を訪問した。このアルヒーフは，ソ連共産党中央委員会附属マルクス＝レーニン主義研究所中央党アルヒーフの後継施設である。割り切った言い方をすれば，ソ連崩壊後，モスクワでは旧マルクス＝レーニン主義研究所の研究棟は民間が経営する社会＝民族問題ロシア独立研究所に，アルヒーフ部門は連邦政府直轄アルヒーフ――昨年から連邦政府直轄ではなく，ロシア連邦文部省が監督官庁になった――に姿を変えた。MEGAに関する協議を終えた後，筆者はここで旧知のガリナ・ゴローヴィナ女史からアルヒーフが所蔵する高野岩三郎関連文書の閲覧とその撮影を許された。

関連文書はアルヒーフでは保管番号F.71, op.50, d.54のファイルに一括して収められている。そのうち高野岩三郎発信書簡は9点，日付は1928年6月25日付が最初で，最後は1930年4月6日付である。同じファイルには，高野書簡に対応するリャザーノフ発信高野宛書簡や電報の写しが11点，所員ツォーベルの高野宛書簡が2点，河上肇(1879-1946)のリャザーノフ宛書簡や大原社会問題研究所のリャザーノフ宛書簡がそれぞれ1点，このほか，大原社会問題研究所が受け取った田邊写真館（大阪）の領収証や大原社会問題研究所の英文パンフレットや創建当時の大原社会問題研究所の写真などが収められていた。日付は最初のものがリャザーノフの高野宛書簡の写し（控え）で1928年1月27日付であり，最後のものもリャザーノフの高野宛書簡の写し（控え）で1930年5月8日付である。河上肇書簡はオリジナルではなく研究所で作成されたロシア語の翻訳で1930年3月頃発信のものである。以下，これらの諸文書の特徴，研究史上の意義について述べよう。

1　ロシア国立社会＝政治史アルヒーフ所蔵大原社研関連文書概観

最初にアルヒーフ所蔵の上記諸文書を概観しよう。大半が書簡のこれらの諸文書を①作成日②発信者→受領者（受領日[2]）③分量その他に区分した上で，概要を摘記すれば次のようになる。なお，以下の一覧でモスクワ発信のものはいずれも高野に送ったものの写し（控え）だが，リャザーノフら発信人の署名が全てに記入されている。

諸文書作成日，（書簡）発信者→受領者（受領日），枚数など	概要
(1)①1928.1.27②リャザーノフ→高野（1928.2.20）③1頁（タイプ）	1927年12月2日付高野岩三郎発信リャザーノフ書簡受領の連絡
(2)①1928.4.17②リャザーノフ→高野（1928.5.7）③2頁（タイプ）	Dr. Ryuに関する問い合わせ
(3)①1928.6.18②リャザーノフ→高野（記載なし）③１枚（電報）	改造社版と聯盟版の二つの『マルクス＝エンゲルス全集』の企画の問い合わせ：“Welche Marxengels Ausgabe unterstützen und bearbeiten Sie? Telegraphieret und schreibet Rjazanov”（貴殿ラハイズレノ『マルクス＝エンゲルス全集』ヲ支持シ，編集セラレルカ？電信オヨビ書簡デレンラクヲ請フ。リャザーノフ）」

(2)　各書簡の受領日については，リャザーノフ宛のものは第1頁に押された日付印から，高野宛のものは高野日誌（大原社研所蔵）の出状・入状一覧および日誌本文と照合して確認した。

諸文書作成日，（書簡）発信者→受領者（受領日），枚数など	概要
(4) ①1928.6.25②高野→リャザーノフ（1928.7.11）③6頁（手書き）[3]	4月17日付リャザーノフ書簡への返信。ベルリンで約束したマルクス/エンゲルス紛失書簡調査や内藤越夫が作成中の『日本マルクス主義文献』の準備状況，改造社版と聯盟版の二つの『マルクス＝エンゲルス全集』の企画が生じた経緯説明。聯盟版への支持表明への感謝。支援依頼。
(5)①1928.6.27②リャザーノフ→高野（1928.6.28）③１枚（電報）1枚	聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』企画への支持表明：「“Ich autorisiere ”alliierte Ausgabe“ stop Brief folgt Rjazanov”（私ハ「聯盟版」ヲオーソライズスル。アトフミ。リャザーノフ）」
(6)①1928.6.28②リャザーノフ→高野（1928.7.16）③2頁（タイプ）[4]	聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』企画への支持表明の詳報
(7)①1928.8.18②高野→リャザーノフ（1928.9.20ツォーベル確認）③書簡2頁（手書き）	6月28日付，7月12日付[5] リャザーノフ書簡，6月28日付[6] 電報への返礼と聯盟版への支援表明に謝辞。マルクス/エンゲルスの書簡を各1通京都帝大で発見。大原社研所蔵のエリノア・マルクスの書簡4点の写しと共に送付。大原社研所蔵欧州著名人自筆文書目録(日付：VII/21あり)添付。
(8)①1928.9.20②ツォーベル→高野（1928.10.9）③第1頁のみ保管	8月初旬来のドイツ出張で，8月18日付の高野書簡を見るのが遅くなったことを詫び，書簡をドイツ滞在中のリャザーノフに転送したこと，書簡写真への謝辞。大原社研所蔵欧州著名人自筆文書の写しを要望。
(9)①1928.10.1②リャザーノフ→高野（1928.10.23）③2頁（タイプ）	8月18日書簡への返礼。京都帝大所蔵の1882年8月24日付のマルクスのエンゲルス宛書簡への質問。大原社研所蔵欧州著名人自筆文書の写し作成を重ねて希望。改造社版全集第1巻への質問。聯盟版進行状況質問。
(10)①1928.11.15②リャザーノフ→高野（1928.12.10）③１頁（タイプ）	研究所の刊行物送付の案内。ブルーノ・バウアー，エトガー・バウアー，ドロンケ，ルーゲ書簡の写し送付を再度要望。改造社版全集への感想と聯盟版進捗状況の報告を再度希望。
(11)①1928.12.1②ツォーベル→高野（1928.12.23）③2頁（タイプ）	内藤越夫の『日本マルクス主義文献』の作成状況に関する問い合わせ。8月18日以来の音信不通を案じ，フランクフルト経由なら書簡のやりとりがもっとスムースになると述べ，フランクフルトのマルクス/エンゲルス出版を紹介する。
(12)①1928.12.10②高野→リャザーノフ（1928.12.24.）③1頁（手書き）	リャザーノフの著作受領の連絡
(13)①1929.1.10②高野→リャザーノフ（1929.1.26）③1頁（手書き）	ツォーベル書簡受領の連絡，大原社研所蔵欧州著名人自筆文書撮影進捗状況報告。
(14)①1929.1.24②ツォーベル→高野（1929.2.18）③1頁（タイプ）	内藤越夫の『日本マルクス主義文献』の完成稿送付遅延に対する督促：「私たちはArchiv第3巻の準備に全力を上げている最中であり，私たちが補完を当てにすることができるかどうかを早急に教えて頂く必要があります。」
(15)①1929.1.31②リャザーノフ→高野（1929.2.25）③1頁（タイプ）	連絡があり安堵したこと，詳報を待つことを手短に伝える。
(16)①1929.2.19②高野→リャザーノフ（1929.3.6）③3頁（手書き）	総計32通の大原社研所蔵欧州著名人自筆文書写真の発送を完了したこと，京都帝大所蔵のマルクス書簡の入手経路は不明であること，内藤の仕事の進捗状況を連絡。聯盟版の挫折告知：「非常に嘆かわしいことですが，日本語版のいわゆるマルクス／エンゲルス全集の聯盟版企画は完全に頓挫しました。しかも主たる理由は書店の財政問題からです（少ない予約とあまりにも多額の出費）」。

(3) この書簡のほぼ全文が次の論文で公表されている。Rolf Hecker, Zu den Beziehungen zwischen dem Moskauer Marx-Engels-Institut und Ohara-Institut für Sozialforschung in Osaka. : Die Marx/Engels-Editionnen in Japan von 1918 bis 1937. In: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung. Neue Folge*. Sonderband 1, Argument-Verlag, Hamburg 1997,S.100ff.

(4) この書簡もほぼその全文が前掲Hecker稿で紹介されている（102,103頁，参照）。

(5) この書簡はアルヒーフで保管されていない。

(6) この返礼で念頭に置かれている電報は，リャザーノフが6月27日に起文した電報(5)であるが，この電報の日本での配達が翌日の6月28日であったために，こうした日付になっている。高野日誌（大原社研所蔵），参照。

諸文書作成日，（書簡）発信者→受領者（受領日），枚数など	概要
(17)①1928.12.31②田邊写真館→大原社研③領収書	額面149円20銭の領収書
(18)①不明②受領印1929.3.1③タイプ（大原社研作成）書簡一覧	32枚の大原社研所蔵欧州著名人自筆文書目録
(19)①1929.2.23②高野→ツォーベル（1929.3.11）③1頁（手書き）	1月24日付書簡への回答：「この回答はおそらく貴殿のご不興を買うことになるでしょうが，ご理解頂きたいのは，私にはほかにする術がないことなのです。第1に，内藤君が病気だからであり，第2に，彼の尽力で問題の『日本マルクス主義文献』を可能な限り完璧に編集できるからであり，加えて第3に，そのドイツ語への翻訳は貴殿がおそらくお考えになっているほど簡単なものでは全くないからです。」
(20)①1929.3.8②リャザーノフ→高野（1929.4.1）③2頁（タイプ）	32枚の大原社研所蔵欧州著名人自筆文書写真受領連絡。マルクス書簡の流出経路不明は残念。内藤の作業完了に期待：「この『文献』はまだ私たちのドイツ語版Marx-Engels-Archivで公表する可能性がある，という期待を抱かせてくれました」。聯盟版の最終的な挫折にたいへん残念だと述べ，余計なことかもしれないが，改造社版のできばえに関する言及を希望。
(21)①1929.4.20②大原社研→リャザーノフ（1929.5.18）③1頁（手書き）	モスクワの研究所から写真代として149円20銭の振り込みがあったことを連絡。
(22)①1929.5.10②高野→リャザーノフ（1929.5.28.）③1頁（手書き）	3月8日付リャザーノフ書簡の受領と文書の写しが役立っていることに安堵した後，内藤が本復して仕事を完了させたこと，この書簡と共に『日本マルクス主義文献』を送ると述べる。
(23)①1929.9.19②高野→リャザーノフ（1929.10.10）③1頁（手書き）	『日本マルクス主義文献』の受領確認の質問：「本年5月10日付で私は貴殿に添え状と併せて『日本マルクス主義文献』（書込有り）をお届けしました。本日までご書簡を頂いておりませんが，『文献』は安着したでしょうか，お知らせ下さい」。
(24)①1929.10.12②リャザーノフ→高野（1929.10.30）③2頁（タイプ）	『日本マルクス主義文献』の不着連絡：「貴殿が既に5月10日に『日本マルクス主義文献』を私に宛てて発送されたという報せに全く驚いています。私は貴殿の添え状も『文献』も受けとってはおりません。従って私は，両者が郵便局で行方不明になったことを恐れるものです」。
(25)①1930.4.6②高野→リャザーノフ（1930.4.26）③1頁（手書き）	郵便局への問い合わせに対する返答：「ほんの数刻前，ようやく局の調査結果が届きました。2つの同封物はちゃんと（しかも1929年5月27日に）宛先に届いている，とあります。ですから私は，貴殿の手元に私の書簡と原稿とがあることを確信しています」。
(26)①1930.5.8②リャザーノフ→高野（1929.5.26）③2頁（タイプ）	詫び状：「ありました！お送り頂いたものは実際迷子になっていました…」。
(27)①不明②河上肇→リャザーノフ③3枚（タイプ，ロシア語写し）(7)	聯盟版挫折に関する所感
(28) その他	大原社研英文パンフレット，社研建物写真（2枚）1927年7月4日の署名がパンフレットと写真の1枚にある(8)。

(7)　この書簡のロシア語訳写しは，ドイツ語に翻訳されて前掲Hecker稿に収録されている（104-106頁，参照）。

(8)　1927年7月3日から8日にかけてのモスクワ訪問の際ツォーベルに直接渡したものであろう。この時期リャザーノフはモスクワに不在で，代理のツォーベルが応接した。高野がリャザーノフに出会ったのはベルリンのソ連大使館であり，同年6月30日のことであった。高野日記，参照。

2　リャザーノフ，高野岩三郎往復書簡が提起する諸問題

(1)　内藤赳夫『日本マルクス主義文献』

前節で概要を見た交信記録は，内容的に，(1) 内藤の『日本マルクス主義文献』，(2)聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』，(3)SPD党文庫から紛失したマルクス/エンゲルス書簡の調査に大別できる。以下順に立ち入ってみてみることにしよう。

(1)内藤の『日本マルクス主義文献』およびこれに関連する高野とリャザーノフとの往復書簡は，文書番号(4)(11)(14)(16)(19)(20)(22)-(26)である。

この『日本マルクス主義文献』を草した内藤は「日本の書誌学の歴史において注目すべき業績をあげた」[9] 人物であり，この『日本マルクス主義文献』は，内外の研究史上初めて，日本におけるマルクス主義の黎明・定着＝普及期を代表する関連文献を，マルクス/エンゲルス関係図書の書誌表記に関する世界標準にしたがって一覧表示しようとする試みであって，内藤の「業績の中心」[10] となるはずの目録であった。

ところが，大原社会問題研究所の正史ともいうべき『大原社会問題研究所三〇年史』(1954)，『法政大学大原社会問題研究所五十年史』(1970)では，この文献目録については不十分かつ不正確な記述しか与えられていないのである[11]。

戦前期の日本におけるマルクス主義の普及は，これまで日本資本主義論争との関連で取り上げられることが多かったが，より広範な問題関心の下でこうした普及史を研究する場合，適切な文献目録が存在することは極めて重要である。既に原文での公表はされている[12] が，使い勝手を良くするには関係者の手による日本語版の作成が切望される。

日本人研究者の社会思想史や経済学史分野における研究は，1980年代以前は，欧米，特にヨーロッパのそれに主たる力点があった。最近は，斯学関係者の間でも戦前期の日本における欧米思潮，経済学説の受容過程の解明が歴史研究の対象になりつつあり，『日本マルクス主義文献』の日本語版作成と公表は，こうした機運を助長深化させるのに大きく貢献するであろう。

⑼　二村一夫「労働関係研究所の歴史・現状・課題」(『大原社会問題研究所雑誌』第400・401合併号所収，1992年4月）4頁。Web版(http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/nk/rodoken.htm - taisengo)（「大原社会問題研究所」の項）

⑽　久保誠二郎前掲稿，本誌14頁。

⑾　詳細は，大村泉「高野岩三郎と『日本マルクス主義文献』」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第39号，2002年，35-56頁，参照。

⑿　『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第39号，2002年，67-171頁，参照。

(2)　聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』の企画

第二に注目されるのは，1928年（昭和3年）に，同人社，弘文堂，希望閣，岩波書店，叢文閣の五社が企画した，いわゆる(五社)聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』に関わる高野および河上肇とリャザーノフとの交流記録である[13]。

1928年2月1日，岩波茂雄が河上肇の書簡を持参して高野を訪ね，同人社，希望閣，弘文堂の3社のマルクス/エンゲルス全集の企画を紹介し，岩波も応分の協力をすることを告げ，高野に協力要請を行った。当時，改造社が社会思想社の同人を中心に別途『マルクス＝エンゲルス全集』(1928-1935年，全37冊)[14]の企画を進めていた。しかし上記三社の関係者は，改造社の構想が拙速不完全であることを理由に別個の全集を企画した。当時日本におけるマルクス経済学の最高権威と目されていた河上や櫛田民蔵らがこの企画に賛同し，岩波は三社の企画こそわが国学術の発展のためであると信じて，――また岩波書店が改造社とライバル関係にあったことも手伝って――，高野を動かそうとしたのであった。

3月1日，高野は大原社研の創立10周年記念事業としてこの全集の編纂監修に当たることを決めた。しかし同年3月15日にいわゆる「3・15事件」が起こり，共産党員とその同調者に対する官憲の全国的な大弾圧が行われ，これによって河上肇は京都帝大を追われ，九州帝大の向坂逸郎，佐々弘雄，石浜知行，東京帝大の大森義太郎らが辞職を余儀なくされた。大原社研も官憲の捜索を受けることになった。捜索は一物の押収すべきものもないという結果になったが，高野は，3月24日，京都で河上と面会して研究所は全集から手を引くことを告げた。数日後，京都の河上から全集計画が破談になったとの報せが入った。ところが4月10日に，岩波茂雄は，前記三社に岩波書店，叢文閣が加わり，五社が協同して全集刊行に参画することになったとして，高野に全集計画への参画を強く要望した[15]。高野はこの希望を容れ，大原社研は『剰余価値学説史』の翻訳に主力を注ぐことを約束した。計画を進めるうち6月初めには全集の編集そのものを大原社研が引き受けることになった。

しかしながらスタートに躓き，五社共同という寄り合い所帯で12名の翻訳委員が全ての原稿に朱を入れるという方法で翻訳編集に当たったために聯盟版の進捗状況は極めて悪かった[16]。

そうした中，6月16日に同人社の大島秀雄が高野に対して改造社はリャザーノフから翻訳権取得の広告を打つという情報を伝える。6月17日，聯盟側も劣勢を挽回すべくリャザーノフに打電する[17]。改造社の広告は18日に掲載されたが聯盟側に返信は届かなかった。

⒀　この企画の詳細は，大島清『高野岩三郎伝』（岩波書店，1968年），およびRolf Hecker前掲稿，参照。以下ではこれらの参考文献の記述が大原社研所蔵の高野日誌およびロシア国立社会＝政治史アルヒーフ・モスクワ所蔵の高野とリャザーノフとの往復書簡によって補完されている。

⒁　改造社版全集については，村田陽一「邦訳ME全集・選集とMEGA」，極東書店『新しいメガ：新マルクス＝エンゲルス全集　Marx-Engels-Gesamtausgabe, 1974-』，極東書店ニュース別冊，1973年，24-28頁，参照。

⒂　岩波が企画復活に傾いたのは岩波書店と改造社との競合が大きく関与していたとみてよい。大島清『高野岩三郎伝』（岩波書店，1968年），参照。

⒃　この詳細は，聯盟版の事務局を努めた小林勇『惜櫟荘主人――一つの岩波茂雄伝――』(岩波書店，1963年)が詳述している。

⒄　高野日誌，1928年6月16,17日の記述，参照。この電文の具体的内容は不明。

河北新報

聯盟版

マルクス エンゲルス 全集

配本 七月十日

第一回 全巻序説 大山郁夫
編輯序言 櫛田民蔵
第四巻八百四十頁

切延期 七月十日

申込金不要 壹冊壹圓

刊行聯盟

The Kahoku Shimpo

改造社版

マルクス、エンゲルス研究の世界的絶對權威、マルクス、エンゲルス研究所長リヤザノフ氏は彼の監修せるマルクス、エンゲルス全集モスコウ版第一卷にさへ這入らなかつた補足材料を提供して改造社全集に援助するに決定、これで改造社版全集は世界に比なき完璧無比のものとなつた、各階級諸賢の熱烈なる支持を期待す、

マルクス＝エンゲルス全集

七月十日迄延期

申込金不要

第一回製本出來

堂々九百四十二頁の大冊となる

一冊壹圓全廿冊

御申込の際は必ず改造社版と御指定をお忘れなく!!

改造社

農業世界

外科 鵜沼醫院

ルービンオニユ

ダイサ矢ッ三
ダイサ線金

酒黨も禁酒黨も

浪江磐林著

橋本病院

河西醫院

昭和３年（1928年）６月23日付，河北新報第１面に見る改造社と聯盟五社の『マルクス＝エンゲルス全集』読者獲得に向けた広告合戦。新聞オリジナルは服部文男所蔵。

17日夜半に上京した高野は，在京幹部の櫛田民蔵，大内兵衛，権田保之助らと連日対策を協議した。19日早朝8時の櫛田との協議ではこれ以上リャザーノフに打電しても無駄ということになり，午後には書店関係者全員に二人で取りまとめた方針を伝えようとした。

そこに大阪の森戸辰男からリャザーノフが6月17日に起文した返電(3) “Welche Marxengels Ausgabe unterstützen und bearbeiten Sie? Telegraphieret und schreibet Rjazanov”（貴殿ハイズレノ『マルクス＝エンゲルス全集』ヲ支持シ，編集セラレルカ？電信ヲヨビ書簡デレンラクヲ請フ。リャザーノフ）が届いたという連絡が入った。高野らがこれに欣喜雀躍したのはいうまでもない。高野と在京幹部3人は次のように返電した。「Ohara Institut als solches und ich als Direktor desselben unterstützen und bearbeiten nicht Kaizo Ausgabe, sondern Renmei (Alliierte) Ausgabe. Brief folgt Takano(大原研究所ソノモノ，ソシテ研究所ノ所長デアル私ハ，改造社版デハナク聯盟版ヲ支持シ編集スル。アトフミ。高野)」，と。これへのリャザーノフの回答が返電(5)であった。

二つの全集企画は全国紙各紙だけではなく地方紙でも大きく宣伝され，予約購読者が募集された。両企画の宣伝戦は1928年6月に頂点に達した。改造社側はリャザーノフを「マルクス，エンゲルス研究の世界的絶対的権威」（河北新報1928年6月25 日付第1面，改造社広告，22頁写真参照），聯盟側は「斯学の世界的権威」（同，聯盟版広告，写真参照）と呼び，その支持をもっとも重要なセールスポイントにしていた。上記返電(3)と高野らのこれへの返電は，この新聞広告で一部手を入れて最大限に活用された[18]。

高野らの上記返電末尾の「アトフミ」に対応するのが高野書簡(4)である。概要は一覧の通りだが，二つの全集に関する部分では，[17日起文の]電報を「今月19日に感謝して拝受した」とした後，同趣旨のものが2つ出るのは嘆かわしいが，「事実的並びに個人的な理由」から両者を統合する試みは灰燼に帰したこと，両方とも同一名称の全集で全20巻各巻500-600頁を予定していること，改造社は「反動的人物」高畠訳の『資本論』だが，聯盟版はこれに対抗して河上訳の『資本論』そして大原社研の『剰余価値学説史』が入ること，編集主任には河上，大山郁夫，櫛田，森戸，そして高

---

⑱　広告合戦が生じたのは，聯盟版五社と改造社とが同じ内容の全集を同じ時期に刊行しようとしたからであった。小泉信三は，これは愚の骨頂であると強く批判した。小泉信三「マルクス全集」（『小泉信三全集第12巻』，文藝春秋，1967年，所収），参照。

⑲　改造社版の翻訳権取得が念頭にあるせいか，ここで高野は「排他的な翻訳権」を要求しているのではなく，「単なる容認」の意味だと，注釈している。前掲Rolf Hecker稿，101-102頁，参照。

⑳　以上で紹介した一連の電報および書簡の連鎖は，(A)6月17日発信リャザーノフ宛て支持依頼電報（具体的内容不明）→(B)リャザーノフ返電(3)（起文[・発信？]6月18日，着信19日）→(C)高野返電（起文・発信6月19日）→(D)リャザーノフ返電(5)（起文[・発信？]6月27日，着信28日）＋(E)リャザーノフ書簡(6)（起草1928年6月28日，着信7月16日）と整理される。(F)高野書簡(4)（6月25日起草，26日発状）は，この連鎖の高野返電とリャザーノフ返信(5)の間に起草・発状され，リャザーノフが手にしたのは，1928年7月11日であった。Rolf Heckerの前掲稿では，（A）が不問に付され，（C）への返電が(B)であり，（F）への返電が（D）であると誤って時系列化されている。

Hecker稿で時系列が誤って紹介されているからか，的場昭弘『未完のマルクス――全集プロジェクトと二〇世紀――』(平凡社選書，2002年)では，誤りは拡大再生産され，(F)は「書簡」ではなく「電報」（同書，158頁）と誤訳され，それへの返答が（D）であったとされている（同書，159頁，参照）。

野が就いていること，リャザーノフには学術上の教示と共に，MEGA――旧MEGA――第1部門第1巻の翻訳許可[19]，そして電信による聯盟版支持の意思表示を得たいこと，を切望している[20]。

リャザーノフの高野宛書簡(6)は，直接には19日付の高野と在京大原社研幹部3人の依頼電報に対するもので，リャザーノフ返電(5)（起文6月27日，着信28日）末尾の「アトフミ」に対応する。ここでリャザーノフは聯盟版の全面支援を約束し，マルクス/エンゲルスは日本や東方問題に関して今日では忘れられているが参照すべき論著が多数あること，未公表のものを含め，聯盟版に使って欲しいものが多数あること，等々を報せている。

直接面識があるからか，リャザーノフの高野に対する信頼は絶大なものがあった。だが聯盟版はリャザーノフのこうした支援があったにも拘わらず7月31日には岩波が聯盟を脱退し挫折する。これは，配本予定の期限が切れても原稿さえ揃わず全集刊行の見通しが不分明さを増すなかで，聯盟側の他の書店が始終岩波にもたれかかった無責任に愛想をつかしたからであったという[21]。高野は岩波の聯盟脱退を思いとどまるように苦慮したが，結局9月9日，万策尽きて聯盟版全集計画は完全に頓挫する。

リャザーノフから高野は繰り返し聯盟版の進捗状況を尋ねられ，10月1日付（着信10月23日）書簡(9)では改造社版の第1巻が届いたことやこれへの高野の所見も報せるように言われるのだが，高野は8月18日付の書簡で手短に触れただけで挫折の話は伝えなかった。明けて1929年2月19日起草の書簡(16)（リャザーノフ着信，3月6日）で高野は初めてこれを伝えた。「非常に嘆かわしいことですが，日本語版のいわゆるマルクス＝エンゲルス全集の聯盟版企画は完全に頓挫しました。しかも主たる理由は書店の財政問題からです（少ない予約とあまりにも多額の出費）」，と。

河上は，リャザーノフから1928年12月24日付の書簡で，『資本論』の新訳など，河上が関わっているマルクス主義普及の労作について問い合わせを受ける[22]。これに対して河上は，リャザーノ

Hecker前掲稿は1994年の大原社研における調査を踏まえたものだが，これを補佐したのは筆者であった。癖のある高野の自筆判読に手間取り，この調査では，時間的制約から日誌を丹念に読むことは出来なかった――当然のことながら，日誌のコピーは許可されていない。2002年春の調査でデジタルカメラでの撮影を許可され，ようやく再読が可能となった。Hecker前掲稿の誤りには，関連記述を十分判読できなかった筆者にも一部責任がある。

(21) 山崎安雄『岩波茂雄』（時事通信社，1961年），参照。安倍能成『岩波茂雄傳』(岩波書店，1957年)は，岩波の聯盟脱退の理由を，端的に言えば，河上が「改造社版に寝返ったのに憤激してのことである」（同,180頁），としている。確かに河上は翌1929年には改造社から『資本論』の邦訳を出し，岩波茂雄はこれに激昂して河上に絶縁状を出したばかりか，岩波文庫に収めていた河上訳の『資本論』，『賃労働と資本』『労賃・価格および利潤』を廃版に付した。そのさい，在庫品はむろん，書店で販売中のものもすべて販売停止にし，即刻返納させ，数十万冊を「ひと思いに断裁にかけてしまった」(山崎前掲書，130頁)という。だが，岩波が聯盟を脱退した時点（1928年7月31日）で，このいわゆる「寝返り」が実際にあり，かつ岩波がそれを知っていたことを確証する文書を，安倍が挙示しているわけではない。『河上肇全集24』に収録された河上の1928年7月18日付櫛田民蔵書簡から，この時期岩波との間で文庫版『資本論』の印税支払いでトラブルが生じていたことが知られるが，それ以上ではない。この点の子細はなお調査を要する。

(22) この書簡は『河上肇全集続5』（岩波書店，1985年）286/287頁に収録されている。次の河上の返書は，河上自身どこでも言及していない。リャザーノフの河上宛書簡も，受領後16年を経て，急に戻ってきたというものであった。

フ宛の返信(27)において，聯盟版の挫折は，出版社がもうけ話がなくなったと言って，真摯な自分たちの提案を拒絶したからであり，加えて，その後の社会状況の変化に伴い，聯盟版の編集を担当していた大原社研の中心的人物は，例えば細川嘉六などごく若干名を例外に，社会民主義的政党の支持者になり，高野は左派社会民主主義の政党である日本大衆党の党首になるかもしれないという噂も生じ，彼らとは共同歩調をとれなくなったからである，と述べると共に，ようやく改造社との間で『資本論』の新訳出版に関する契約が整った，と言うのである。編集者側の翻訳原稿作成の遅延を棚上げにして，聯盟版挫折の主要因をもっぱら書店側の都合――この点は高野も同断――と政治状況のせいにするのは身勝手にすぎるといえる[23]が，同時に，ここから1920年代末の国際共産主義運動におけるファシストと社会民主主義者を同列に置く「社会ファシズム論」の否定的影響が日本国内の知識人の間でも先鋭化しているのを容易に看取できる。

(3)　マルクス/エンゲルスの紛失文書調査

高野とリャザーノフとの交信記録で第三に特筆すべきは，高野のマルクス/エンゲルス関連書簡に関する真摯な探索であろう。

1927年6月30日，ベルリンの旧ソ連大使館でリャザーノフと面談した高野は同日付の日記にリャザーノフから依頼された内容を次のように記していた。「S.P.D. ArchivヨリMarx及Engelsノ手紙十二通紛失（Drahn之ニ関係シタルヤウノ伝アリ）日本又ハ米國ノ人ニ渡リタル嫌アリ，其ノ探索方トモシ分明シ其ノ手紙ノ公表スル場合決シテ個人ニ迷惑掛ケマジキヨウ伝アリ帰朝ノ上ハ心掛ケオクベク諾ス」，と。

高野の帰国は1927年11月であったが，1928年6月25日付の高野書簡(4)によれば，高野はこの依頼に応えるべく至る所に質問したという。残念ながらこの時点では成果はなかったが，Dr.T.Ishihama（石浜知行）が2年前に出した書物[24]で彼が所有するマルクス/エンゲルスの書簡をそれぞれ1通，マルクスの手稿を1点公表したことを報せている[25]。

また1928年8月18日付の高野書簡(7)――26/27頁写真，参照――は，偶然，京都帝大経済学部がマルクス/エンゲルスの書簡を各1通保管していることが判明し，運良く学部から借り出し写真撮影できたのでこれを送ること，同時に大原社研が所蔵するエリノア・マルクスの書簡4点の写しも同封することを伝えている。この書簡には，当時大原社研が所有していた欧州著名人自筆文書32点（多くは書簡）のリストも同封されていた[26]。この32点とは次の人物のものである。

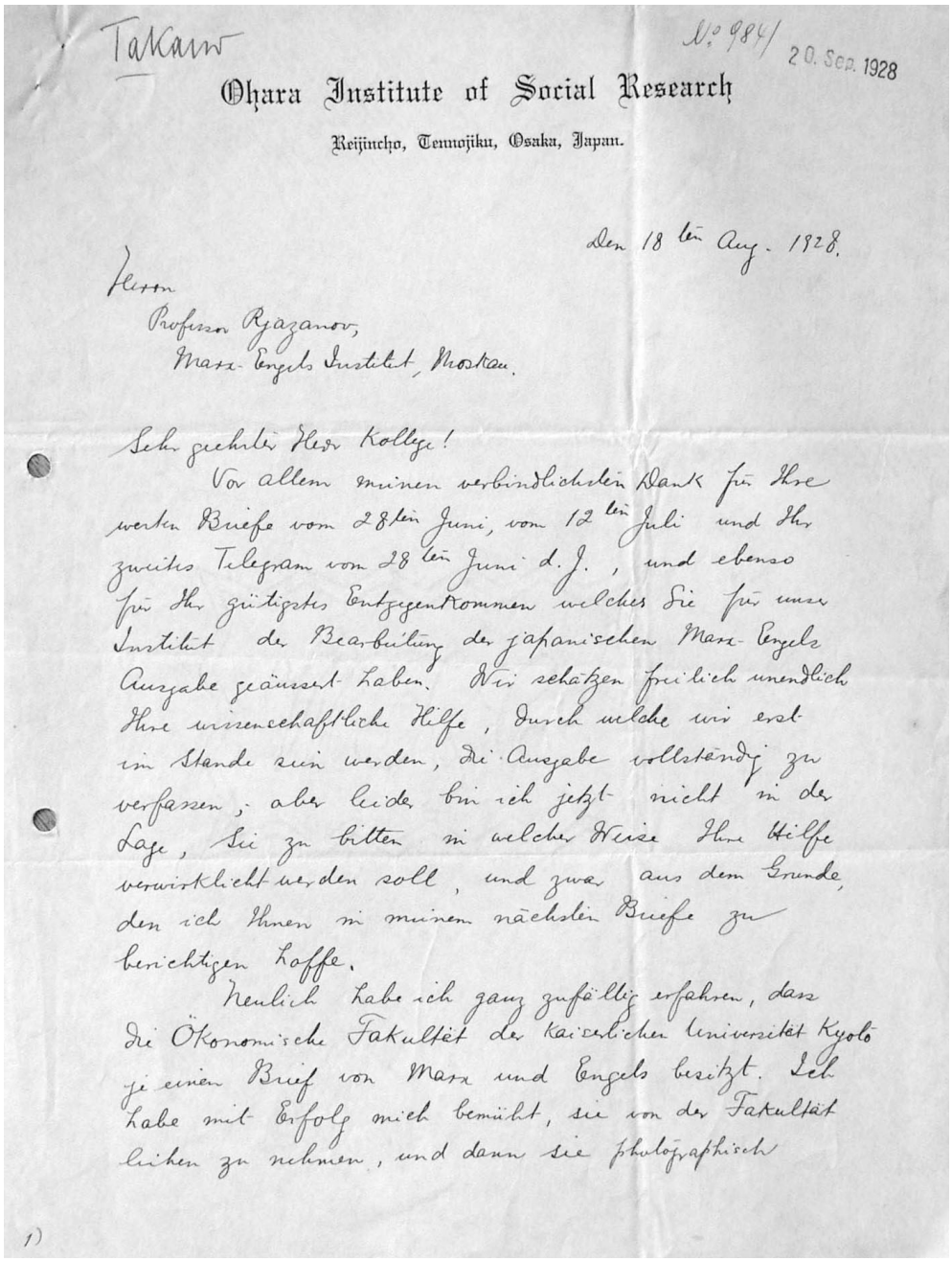
---

(23)　河上自身は，後に「河上肇より櫛田民蔵に送りたる書簡集」（『河上肇全集24』，岩波書店，1983年）への追記で聯盟版挫折の理由を原稿作成の遅延に求めている（同，208/209頁，参照）。

(24)　石浜知行『闘争の跡を訪ねて』（同人社，1926年）。

(25)　高野がこの書簡で伝える石浜の書物名は“ Reiseandenken von Europa und Amerika”（欧米紀行）である。これはかなりの意訳であって，このドイツ語タイトルだけから，本書を探索するのはかなりの困難が伴った。ちなみに，新MEGAでは“ Den Spuren der Kämpfe nachgegangen”と直訳されている（新MEGA第3部門第1巻，アパラート，691頁）。

(26)　高野書簡本文にはこのリストには直接言及がないのだが，総計5点のエリノア・マルクスの書簡のうち，リストでは，Hirsch宛の1875年8月25日付のものに手書きで撮影不可能の文字がある。本書簡に対する10月1日



Takano

No. 984/ 20. Sep. 1928

Ohara Institute of Social Research

Reijincho, Tennojiku, Osaka, Japan.

Den 18ten Aug. 1928.

Herrn
Professor Ryazanov,
Marx-Engels Institut, Moskau.

Sehr geehrter Herr Kollege!

Vor allem meinen verbindlichsten Dank für Ihre werten Briefe vom 28ten Juni, vom 12ten Juli und Ihr zweites Telegram vom 28ten Juni d. J., und ebenso für Ihr gütigstes Entgegenkommen welches Sie für unser Institut der Bearbeitung der japanischen Marx-Engels Ausgabe geäussert haben. Wir schätzen freilich unendlich Ihre wissenschaftliche Hilfe, durch welche wir erst im Stande sein werden, die Ausgabe vollständig zu verfassen, aber leider bin ich jetzt nicht in der Lage, Sie zu bitten in welcher Weise Ihre Hilfe verwirklicht werden soll, und zwar aus dem Grunde, den ich Ihnen in meinem nächsten Briefe zu berichtigen hoffe.

Neulich habe ich ganz zufällig erfahren, dass die Ökonomische Fakultät der kaiserlichen Universität Kyoto je einen Brief von Marx und Engels besitzt. Ich habe mit Erfolg mich bemüht, sie von der Fakultät leihen zu nehmen, und dann sie photographisch

1)

高野書簡：「1928年８月18日付，高野発信リャザーノフ宛書簡・書簡（７）」，オリジナルはロシア国立社会＝政治史アルヒーフが所蔵。

Ohara Institute of Social Research

Reijincho, Temmojiku, Osaka, Japan.

abdrucken zu lassen. Diese Abdrücke erlaube ich mir Ihnen als besondere Beilage zuzusenden, ausserdem noch 4 im Besitz von unserem Institut sich befindenden Abdrücke der Briefe von Eleanor Marx.

Mit den besten Grüssen

Ihr ergebener

Tadasaburo Takano

2)

1005

1. Oktober 1928.

Herrn
Professor Iwasaburo Takano,
Ohara Institute of Social Research,
Osaka,
Japan.

Sehr geehrter Herr Kollege,

haben Sie bitte vielen Dank für Ihren sehr freundlichen Brief vom 18. August und die Beilagen, die mich sehr erfreut haben. Sämtliche Briefe sind vom biographischen Gesichtspunkte wertvoll. Es wäre sehr interessant zu erfahren, bei welchem Antiquar die Universität Kyoto den Brief von Marx an Engels (24.VIII.1882) erworben hatte. Ich weiss zwar, man rückt nicht gerne mit solchen "secrets de la maison" heraus, doch bitte ich Sie, wenn Sie ohne besondere Mühe die Quelle erfahren könnten, sie mir mitzuteilen. Vielleicht führt dann diese Spur zu neuen Funden, und daran sind wir doch alle interessiert.

Was nun die übrigen Briefe, die das Ohara-Institut besitzt, betrifft, da kann ich nur die schon von Herrn Dr. Czobel geäusserte Bitte, diese Briefe für uns - und natürlich auf unsere Kosten - photographieren zu lassen, wiederholen. Die Briefe von B. und E. Bauer, von Dronke und Ruge könnte ich vermutlich noch für die Einleitung des 2. Halbbandes der ME-Gesamtausgabe benutzen, - ich wäre also für eine möglichst beschleunigte Zusendung der Photokopien besonders dankbar.

Den einen Brief der Eleanor an Hirsch (25.VIII.1875) sandten Sie in Abschrift, weil sich keine gute Photokopie machen lässt. Ist es nicht ein Zuviel von mir, Sie mit dem Verlangen zu belästigen, auch diesen Brief trotz alledem zu photographieren, so bitte ich Sie darum. In unserem Archiv werden auch die blassesten Aufnahmen entziffert und obwohl der gesandte Text fast lückenlos ist, wäre mir eine wenn auch unzulängliche

リャザーノフ書簡：「1928年10月１日付，リャザーノフ発信，高野宛書簡・書簡（９）第１頁」，オリジナルはロシア国立社会＝政治史アルヒーフ所蔵。これは高野に送られたものの写し（控え）である。

Iganz Auer, Bruno Bauer, Edger Bauer,August Bebel, Louis Blanc, Jérome Adolphe Blanqui, Karl Blind, Robert Blum, Ernst Dronke, Prof. Dr. Fichte, Karl Grün, Eduard von Hartmann, Gräfin Sophie Hatsfeldt, Karl Heizen, A. Herzen, Gottfried Kinkel, Ferdinand Lasalle (2点), Wilhelm Liebknecht(2点), August Adolf Ludwig, Eleanor Marx (5点), Franz Mehring, V.A. Mirabeau, Arnord Ruge (3点), G. Schönberg, Schultze-Delitsch, Wilhelm Weitling

Dr.T.Ishihamaの著作に対する反応は不明だが，8月18日付書簡の同封物には，まず9月20日付のツォーベル書簡(8)で，ついで10月1日付のリャザーノフ書簡（9）――28頁写真，参照――で，大きな感謝と強い反応があった。リャザーノフは京都帝大が保有していた1882年8月24日付のマルクスのエンゲルス宛書簡について入手経路を尋ねた。明らかになれば，同一の経路をたどってさらに文書探索が可能となる，というのである。またエリノア・マルクスの書簡4点の写しにもたいへん感謝し，リストに含まれている32点の文書全体を撮影して写しを送って欲しい，費用はもちろんモスクワ持ちで結構，という提案をする。

既述のように，8月の書簡以後，しばらく高野はモスクワに書簡を認めないのだが，この間も，リャザーノフは11月15日付書簡(10)で32点の文書の写しの送付を要望している。高野の1929年1月10日付書簡(13)は業者に依頼した写真はまもなくできあがることを告げ，翌2月19日付書簡(16)は，撮影した写真を送付したこと，京都帝大のマルクス書簡は帝大が「Dr. K. Fukui〔福井孝治〕という方の土産として」入手したものだが，帝大は福井の現住所が分からないので，入手方法を尋ねることが出来ないことを明らかにしている[27]。

リャザーノフはこの文書写真を1929年3月1日に受領する[28]。彼は3月8日付で鄭重な礼状(20)を高野に送り入手経路が不明なのはたいへん残念だと記している。社研の1929年4月20日付書簡(21)は，立て替えた必要経費がモスクワから社研に振り込まれたことの連絡であり，高野は5月10日付書簡(22)でこれらの文書がモスクワで役立つことを喜んでいる，と記している。

付のリャザーノフの返書では，この文字に言及があり，リストの上には日本人の筆跡（書順）でVII/21の日付が入っていることから，このリストも本書簡に同封された，と判断した。

(27) 福井孝治は，2通の書簡の入手後40年以上を経た1968年に，書簡の入手や京都帝大に寄贈した経緯などを次のように書いている。入手したのは福井が1923年春から約20ヶ月間ドイツに留学していた時期のことで，リャザーノフや櫛田が足繁く通った古書肆フーゴー・シュトライザントであった。福井によれば，正確な価格は忘却したが日本人の感覚から云えば安かったように覚えていて，ドイツはハイパーインフレ下であったので，マルク貨ではなくポンド貨で払った。帰国後1925年春に恩師の河上に最上の土産と思って持参したところ，河上から，個人で所有するのは惜しい，どこか適当なところへ収めた方がよいとアドバイスされ，その後河上から書簡で，大原社研か京大に収めてはどうか，大原は相当な価格で買い取っても良いような意向である，と言われた。しかし最終的には母校の京大に寄贈することにした。さらにその後，河上の書簡で大原を通じて両書簡の写真版がモスクワのマルクス＝エンゲルス研究所に送られたことを教えられた，という（福井「思い出すままに」，『経済論叢』第102巻第5号，1968年，125-127頁。この『経済論叢』には，書簡の写真複製と解読文，訳文が掲載され，田中眞晴の簡明な解説が付記されている）。

(28) 文書目録(18)の受領印，参照。

補説：東北大学附属図書館所蔵『哲学の貧困』マルクス手沢本の第一同定者について

この3年間の高野によるマルクス/エンゲルス紛失書簡の探索や，大原社研の著名人自筆文書送付に関する尽力を念頭に置くと，『哲学の貧困』マルクス手沢本に関する日本人第一同定者に関する久留間鮫造と宇佐美誠次郎の見解は信憑性に乏しい，といわざるを得ない。

この手沢本は現在東北大学附属図書館で所蔵保管されている。旧蔵者は大原社研の櫛田民蔵であった。本刊本の見返しの裏には櫛田自身によって1921年7月27日にドイツ社会民主党アルヒーフで入手したと記されている。

久留間によれば，櫛田に刊本を贈ったアルヒーフの人物はこの刊本がマルクスの手沢本であることを認識していなかったが，櫛田自身は知悉していて，「それをぼくに見せて，これは自分の私有すべきものではなく当然研究者〔大原社会問題研究所の誤記であろう――引用者〕に帰属すべきものだが，自分が生きているあいだは自分の手元におかしてくれ，といったことがある」という。これが東北大学の所有するところとなったのは，「手違い」であって，久留間自身は，大原社研に残すべきものとして指示もしていた，という[29]。

宇佐美誠次郎『学問の五〇年』（新日本出版社，1985年）は，田中菊次がこの刊本のマルクス手沢本第一同定者であるという田中の自己認識[30]を批判したもので，その理由の第1は，この久留間の証言であった。ちなみに，本書で宇佐美は，久留間がこの発言を櫛田から聞いたのは二人のベルリン滞在中のことであったとしている。第2は，東北大学の刊本購入価格に関係する。櫛田の没後，東北大学が高野の女婿であった宇野弘蔵を介して櫛田の遺文庫約7000冊を購入したとき，総額が約3000円であったのに，『哲学の貧困』1冊の価格が群を抜いて高く250円であったのは，マルクスの手沢本であることが関係者間で了解されていたからである，というものであった。第3は，改造社版第3巻に『哲学の貧困』の翻訳をよせた山村喬の東北大学での手沢本調査[31]は田中の同定時期に先行している，というものであった。

宇佐美のこの田中批判に対しては，田中自身が批判点3について，田中が保管していた当時の「東北帝國大學附屬圖書館　圖書借受證」などを典拠に田中がこの刊本をマルクス手沢本と同定した1950年前後の状況を克明に明らかにして当該時期に関する宇佐美の事実認識の矛盾を指摘し，田中の同定が山村の調査に先行していたことを明確にした[32]。批判点2については，筆者が，当時のドイツの古書カタログや古書の取引価格を典拠に，『哲学の貧困』の売却価格250円というのは，決して高価ではないこと，『哲学の貧困』初版本の時価であったこと，もし手沢本であることが当時既に知られていたなら，『哲学の貧困』著者献辞入刊本のカタログ価格から推定して，このような安価では決してなかったことを明らかにした[33]。

問題は宇佐美の批判点1，したがってまた久留間「証言」の信憑性だが，ここでは次の3点を指摘する必

---

(29) 久留間鮫造「連載社会科学50年の証言第3回――欧州の思い出――」『エコノミスト』第51巻，1973年9月4日号，90頁，参照。

(30) カール・マルクス『哲学の貧困』（ファクシミリ版）編注・田中菊次，青木書店，1982年，参照。

(31) 山村喬「『哲学の貧困』のマルクスによる訂正について」，『経済志林』第20巻第1号，第2集，1952年1月，66-84頁，参照。

(32) 田中『マルクス経済学の学問的達成と未成』，創風社，1989年，参照。

(33) 大村泉『新MEGAと<<資本論>>の成立』，八朔社，1988年，参照。

要がある。第1に，本稿で見たように，高野によるSPDアルヒーフ旧蔵マルクス/エンゲルス書簡の紛失調査は徹底したものであったし，彼は直接依頼を受けなかったエリノア・マルクスやバウアー，ベーベル，リープクネヒト，ヴァイトリングらの32点におよぶ社研所蔵の自筆文書をリャザーノフに報せていたのである。もし櫛田に問題の刊本がマルクス手沢本であるとの自覚があれば，大恩ある高野に櫛田が進言してなかったというのは甚だ不自然というほかはない。櫛田が久留間に「これは自分の私有すべきものではなく当然」大原社研「に帰属すべきものだ」といっていたのが真実なら，櫛田は高野に顚末を話していた，と見るべきであろう。だが，高野の側にはこの種の認識は皆無なのである。第2に，山村が改造社版全集に『哲学の貧困』の翻訳を収めたとき，「凡例」で「マルクス自らの修正が施されてゐると云ふドイツ社會民主黨文庫の所蔵本を参照し得ない今」[34] 底本の疑問な箇所は「大原社會問題研究所々蔵の初版」[35] によって訳出するのが最善であると判断した，というのである。山村は一時大原社研に在籍し，退職後も久留間と共に翻訳の仕事をしているのであって，久留間の「証言」が真実なら，櫛田は山村に問題の刊本を貸与していたのではあるまいか。山村がこの翻訳をしたのは高野の調査時期と重なっているのである。第3に，久留間は1947年5月に刊行された『読書展望』第2巻第4号の連載「全国図書館めぐり，その4」を担当し，大原社研の蒐書活動を紹介するなかで，櫛田の文書蒐集に触れ，懐かしい思い出として，櫛田がマルクスの「自由貿易論」のパンフレットを見つけだしたときの興奮ぶりを伝えているが，『哲学の貧困』の手沢本には触れていない。久留間「証言」と史実との間のこうした大きな落差は，久留間「証言」の信憑性に強い疑問を投げかける。

(4)　福井孝治，石浜知行旧蔵マルクス/エンゲルス書簡の公表

リャザーノフと高野との往復書簡はそれぞれ1930年4月6日と5月8日で終わる。両者のこれ以上の交流は物理的にも不可能であった。高野は1930年6月10日，胆石病のために神戸の昭生病院に入院し，翌年2月末には危篤状態に陥る。奇跡的に病状は回復するが，3年余の間病床を離れることはなかった[36]。高野が病に伏していた間に，1931年2月15-16日，リャザーノフはスターリン主義の犠牲となって逮捕拘禁され1938年1月21日に銃殺されたのであった。

既述のように，1923年にベルリンで福井孝治が購入し，母校の京都帝大に寄贈したマルクス/エンゲルの書簡各1点は，高野によって1928年8月18日付の書簡に同封してリャザーノフに送られた。その後の研究所における両書簡の扱いはどうであろうか。書簡2点のうち，リャザーノフが大きな関心を示した1882年8月24日付のマルクスからエンゲルス宛の書簡は，1931年に旧MEGA第3部門(往復書簡)第4巻で初めて公表された。刊行者はリャザーノフの後を襲ったアドラツキーであった。その後本書簡はMEW第35巻にも収録された[37]。旧MEGAでは収録に際し，脚注で“Das Original dieses Briefes befindet sich im Archiv der ökonomischen Fakultät der Kaiserlichen Kyoto-Universität, Japan”（この書簡のオリジナルは日本の京都帝国大学経済学部アルヒーフにある）と

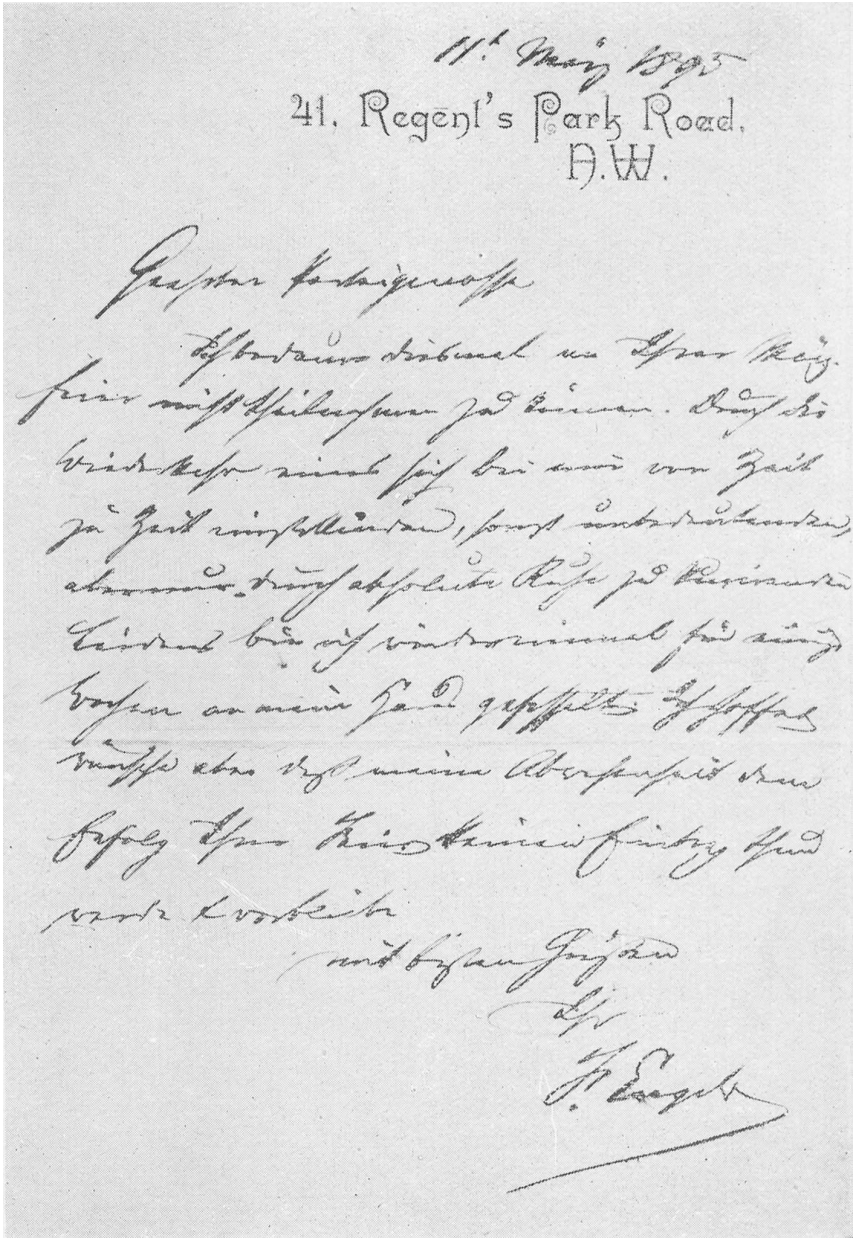
---

(34)　改造社版『マルクス＝エンゲルス全集』第3巻,1929年，657頁。

(35)　同，656頁。

(36)　前掲，『高野岩三郎伝』，313-319頁，参照。

(37)　旧MEGA第3部門「往復書簡」第4巻，1931年，553/554頁。書簡番号1538。



11. März 1895

41, Regent's Park Road,
N.W.

Geehrter Parteigenosse

Es betrübt mich, in Ihrer Zuschrift nichts Erfreuliches zu hören. Daß Sie Ihre Kräfte nicht sich bei mir von Zeit zu Zeit einstellen, sonst unbedeutend, aber durch absolute Ruhe zu vermehren [illegible] bis ich wieder einmal für einige Wochen an mein Heim gefesselt. Es hoffe, daß es bald meine Aufgabe sein wird, Ihnen Ein Kleines hierzu Ihnen verhelfen zu helfen.

Mit besten Grüßen

Ihr

F. Engels

オリジナルの所在が明記された。1894年12月6日付のエンゲルス書簡は旧MEGAでは公表されず[38]，1963年にMEW第22巻で “[An den Deutschen Bildungsverein für Arbeiter in London]” という仮題の下に初めて原語で公表された[39]。ここではMEWの性格からか，オリジナルの所在情報は記載されていない[40]。

では石浜知行『闘争の跡を訪ねて』に収録された文書についてはどうか。石浜は本書にマルクスのベルンシュタイン宛書簡，エンゲルスの1895年3月11日[41]付書簡，さらにマルクスが起草した新ライン新聞編集部の「声明」を挿入写真として組み込み，翻訳を添付して公表した。高野は本書を1928年6月末にリャザーノフに送った。旧MEGAにはこれらの文書は収録されなかったが，マルクスのベルンシュタイン宛て書簡はMEW第27巻に[42]，エンゲルス書簡は，京都大学所蔵のエンゲルス書簡と同様，[An den Vorstand des Deutschen Bildungsvereins für Arbeiter in London]という仮題を付してMEW第22巻に[43]，そして新ライン新聞編集部の「声明」はMEW第6巻に[44]収録され，原語による最初の公表がおこなわれた。ここでもMEWの性格からか，オリジナルの所在情報は記さ

---

(38) 旧MEGAの第3部門「往復書簡」は全10巻を予定していたが，第4巻で中断した。第1～4巻に収録されたのは，基本的にマルクスとエンゲルスとの間の往復書簡であった。

(39) MEW第22巻，1963年，507頁。この書簡は，平井俊彦「エンゲルスの未公刊書簡」『経済論叢』(第117巻第4号，1976年4月)で写真版と共に公表されている。MEWで公表されてから13年後にも拘わらず平井がこのようなタイトルを選んだのは，この間MEW当該巻を参照することがなかったからであろう。なお平井の解読原稿では，正書法や省略など，MEWのように修正が施されておらず，オリジナルのままであって，平井の論考は本書簡のオリジナルに忠実な最初の公表である。

(40) 高野が送った2通の書簡のモスクワ・アルヒーフにおける現在の保管番号は，マルクスの書簡はF.1,op.1,d.4240，エンゲルス書簡はF.1,op.1,d.5397である。

(41) 石浜はこの書簡のエンゲルスによる日付を1895年5月11日と解読している。添付写真――32頁写真，参照――から窺えるように，石浜は，書簡右肩のエンゲルスが記入した日付を11th.May 1895と英文で書かれているように判読したのであろう。石浜は本文の解読で，1行目末尾から2行目の2行にわたって記載された単語を「5月祭」と判読している。しかし，書簡の日付右肩の単語はドイツ文字のMärzであって，英語のMayではない。aの上にドイツ文字特有のウムラウトが記されているからである。また，本文1-2行目の単語はMärzfeier(3月祭)である。この１行目末尾のMärzと日付の単語は同一であって，日付をMay（英単語）と理解する訳にはいかない。石浜は本文1-2行目のこの単語を「5月祭」（メーデー）と解読し，前後の文脈を過去形で訳出しているが，原文は現在形である（石浜，前掲書，248頁と249頁との間の挿入写真に貼付された翻訳文，参照）。ここでエンゲルスは「５月祭」に出席できなかったことをわびているのではなく，「3月祭」（パリコミューンの記念祭であろうか？）に出来なくなることが残念だと言っているのである。したがって，MEWでの当該箇所における解読訂正は妥当である。ちなみに，筆者は，最初，石浜の日付解読を前提にして旧MEGA，MEWでの既公表の有無を確認したために，この書簡が未公表の可能性があるとの錯誤に陥った。

(42) MEW第27巻，1973年，431頁，参照。アルヒーフの保管番号：F.1,op.1,d.133.

(43) MEW第22巻，1963年，528頁，参照。アルヒーフの保管番号：F.1,op.1,d.5489.

(44) MEW第6巻，1970年，523頁，参照。アルヒーフの保管番号：F.1,op.1,d.298. この声明は，1849年6月2日および7日付の『新ドイツ新聞』第129号および第133号とさらに1849年6月3日付の『新ケルン新聞』第126号とに掲載されたものである。しかしMEW本文では「声明」本文末尾にNach der Handschrift(手稿による)と記しているのであり，ここでの底本は，高野が送った石浜の著作挿入写真であるのは明白である。なお，石浜が

れていない。その後ベルンシュタイン宛て書簡は新MEGA第3部門第1巻に収録される[45]。このとき執筆時期の再検討が行われ，アパラート部で，「石浜知行：闘争の跡を訪ねて」[46]のファクシミリが初出であること，オリジナルは現在不明であることが明記されている。ちなみに，MEGAに漢字やひらがなが登場したのはこれが最初ではあるまいか。

筆者は，筆者がモスクワで蒐集した内藤赳夫の『日本マルクス主義文献』のコピー，高野とリャザーノフとの交流記録画像のすべてを法政大学大原社会問題研究所に寄贈する。1928年～1930年という日本と旧ソ連の歴史が大きく旋回する間に，強い信頼関係で結ばれた，両国の進歩的知識人のこうした交流記録がいっそう多くの関係者の知るところとなり，今後の日ロ両国間の学術交流を進展させる一助となることを期待する。

[付記]

本稿の作成で，早川征一郎法政大学教授，法政大学大原社会問題研究所若杉隆志氏から大原社研所蔵の高野日誌の閲覧や久留間鮫造旧稿の探索でご配慮をいただいた。京都大学所蔵のマルクス/エンゲルス書簡の京都大学での取り扱いについて櫻田忠衛京都大学大学院経済学研究科講師から有益な情報を得た。石浜知行『闘争の跡を訪ねて』の探索は注25に記した事情で困難を伴い，東北大学大学院経済学研究科図書室の柄目美香さんの協力を得た。また，注41末尾に記した「錯誤」を解消する際，ロルフ・ヘッカーベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー教授，服部文男東北大学名誉教授，ゲオルギー・バガトゥーリア国際マルクス/エンゲルス財団MEGA編集委員会委員長から有益な助言を得た。服部教授からは聯盟版と改造社版の広告合戦に関する河北新報オリジナルの提供を受けた。仙台大学の大和田寛教授から聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』出版計画の挫折に関する諸文献についてご教示をいただいた。以上記して感謝の意を表する。

本稿で紹介した石浜知行旧蔵のマルクス/エンゲルスのオリジナル文書3点のその後の所在について，読者諸兄姉の中で情報をお持ちの方がいらっしゃる場合，下記宛ご連絡をお願いしたい。

大村泉：omura@econ.tohoku.ac.jp

[追記]

本稿校正の段階で，石浜知行『闘争の跡を訪ねて』に収録されたマルクス/エンゲルスの書簡・文書の公表について，ヴァレーリー・フォミチョフ（モスクワ・アルヒーフ，マルクス/エンゲルス部門主任研究員）から，現在アルヒーフにおけるベルンシュタイン宛書簡の保管番号はF.1,op.1,d.133であり，1928年10月14日に入手とされていること，原語による公表とは別にロシア語版マルクス/エンゲルス著作集初版，第2版でも活字になっていること，新ライン新聞編集部の「声明」のフォトコピーは，1927年にI.ワイデマイヤー遺文庫からアルヒー

『闘争の跡を訪ねて』で紹介しているのは「声明」本文のマルクス自筆稿であって，添え状は現在アムステルダム・社会史国際研究所で保管されている(社会史国際研究所保管番号：マルクス遺稿C194/C192)。MEWでの公表は両者を一括したものである。

(45) 新MEGA第3部門第1巻，248頁。

(46) 新MEGA第3部門第1巻，アパラート，691頁。

フが入手したことになっていること――したがってこの「声明」のオリジナルはこの遺文庫から流出した可能性がある――，またこの「声明」もロシア語版マルクス/エンゲルス著作集初版，第2版，『共産主義者同盟』第1巻（独文），英語版著作集，等で既に活字になっていること，エンゲルス書簡の保管番号はF.1,op.1,d.5489であって，石浜の書籍からとられたとされており，これもロシア語版マルクス/エンゲルス著作集初版，第2版等で既に活字になっている，との情報提供を受けた。

さらに，フランソワ・メリス（ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー研究員）からは，ミュンヘンのバイエルン州立図書館で所蔵されている往時の古書肆オークションカタログから，石浜がマルクスのベルンシュタイン宛書簡を購入したのは，1923年5月7日（月曜）にベルリンの古書肆ヨゼフ・アルトマンで午後開催された競売においてであり，見積価格は25ライヒスマルクであった，との情報提供を受けた。

以上，参考までに紹介したい。貴重な情報を提供してくださった両氏に感謝の意を表する(2005年4月20日)。

（おおむら・いずみ　東北大学大学院経済学研究科教授）

法政大学大原社会問題研究所叢書　○好評発売中○

◉戦後日本の起点で活躍した改革派ジャーナリストのオーラル・ヒストリー
法政大学大原社会問題研究所編――A5判・四四〇頁・六九三〇円
証言 占領期の左翼メディア
占領当時の論壇状況や世論、政治・社会運動の背景、左翼運動の人脈や秘話を知ることのできる得がたい史料。編集：吉田健二

◉占領期の日本労働運動史・労使関係史の基礎資料
法政大学大原社会問題研究所編――A5判・三九〇頁・六八二五円
証言 産別会議の運動
産別会議の運動家の証言から産業民主主義の展開や経済再建との関連を視野に入れた労働運動史・労使関係史の解明。編集：吉田健二

◉革新政治と労働組合運動の今日的課題を提示
五十嵐仁著――A5判・四六〇頁・六三〇〇円
政党政治と労働組合運動
――戦後日本の到達点と二十一世紀への課題――
戦後日本における政党政治の変遷と労働組合とのかかわりに焦点をあて分析。革新政治の課題と労働組合運動の今日的課題を提示。

◉「社会史」の方法から見た社会運動史
梅田俊英著――A5判・三六〇頁・五二五〇円
社会運動と出版文化
――近代日本における知的共同体の形成――
大正デモクラシー期における社会運動と出版文化の歴史を手書きメモ、日記、手紙、予審調書など新しい史料で再構成。

◉普通選挙の実施という新たな政治条件下の農民運動
横関至著――A5判・三三〇頁・五二五〇円
近代農民運動と政党政治
――農民運動先進地香川県の分析――
普選下の農民運動は小作争議と共に選挙・議会活動も重要な柱であり、その運動の動静が政党政治に及ぼした影響を解明。

◉終末期訪問診療の現場からの優れた実践
嶺学・時田純・季羽倭文子編著――A5判・三三〇頁・三九〇円
高齢者の在宅ターミナルケア
終末期高齢者への質の高い支援を目指し全国的な社会システムとして実現・運営出来るような条件を優れた実例より究明。

御茶の水書房　〒113-0033 東京都文京区本郷5－30－20 電話03(5684)0751
ホームページhttp://www.ochanomizushobo.co.jp/